

二十歳の誓い

僕はどこにでも居るいわゆる普通の大学生です。少し出しゃばりで目立ちたがり、内弁慶で人見知り、そんな二面性を持った人間です。でも中学校では生徒会長を務め卒業式では答辞を読みました。高校では先輩に推薦され、バスケットボール部のキャプテンを務めることになりました。経歴だけ見るとものすごく輝かしいです。自分でもそう思います。しかし実際はそんなに輝かしいものではありませんでした。

バスケットボールにおいてキャプテンは一般的に「4番」のユニフォームを着ます。「4番」と言えば花形です。でも僕はレギュラーではなく、控えでした。ほかのチームの「4番」は試合で活躍する中、笛が鳴っても僕はズーっとベンチに座っています。スポーツの世界は実力社会です。控えのキャプテンの言うことを聞いてくれない可能性がありました。部員からの信頼を得るために誰よりも声を出すことを意識しました。そしてみんなに気を配り「こいつがいるから練習に行きたい」と思われるようになるのが目標でした。

大学生になり、子どもたちと野外活動などをするボランティア団体に入りました。そこで出会った一人の仲間に、自分の弱点に気づかされたのです。彼は、「自分のことは後回し。団体のため、仲間のためなら人の嫌がることを率先してやる」そんな男です。中学・高校と人を引っ張る立場にあった僕は、むしろ上辺だけ取り繕うのが上手くなり、人の目を気にしてばかりの人間であると気付かされました。

将来の夢はまだ見つかっていません。ふわふわと宙ぶらりんに生きています。でもこれも二十歳という年齢の特権かなと思います。今のうちに色んなところへ飛んでいき、色んな景色を見て様々な人に出会い、自分の世界を広げたいです。上辺だけでなく中身で勝負出来る人間になりたいです。

そしていつか、「人のために尽くす生き方」というのにも近づきたいと思います。とにかく今は、人生の岐路に立たされ選択を迫られたとき「どっちのほうが楽しい？お前が楽しいと思うのはどっちだ？」と問いかけ、「自分の心に素直に生きる。自分に嘘はつかない。」ということをして二十歳の誓いにしたいと思います。

令和4年1月10日 新成人代表 原田 隆矢

二十歳の誓い

私は、小学校から高校を卒業するまでに沢山悩み考えてきました。

6人兄弟の4番目で、これだけ兄妹がいれば勉強を教えあったり、お互い助け合ったりするかと思いますが、私の兄と姉は勉強が得意ではなかった為、教えて貰うなんてことは全くありませんでした。両親も共働きということあり、小さい頃から『自分のことは自分でやる』という母の教えの元、なるべく自分で判断し行動してきました。でも幼い頃の自分の判断は、良かれと思い行動したことで、親に怒られることが度々あり、悔しくて辛い思いも覚えています。

私は絵を描くことが好きで唯一の特技でもありました。絵は家族や友人に「上手！」と褒めてもらい、コンテストで取った賞はすごく嬉しく、「イラスト関係の仕事に就きたい」という夢を持っていました。母にその夢を伝えると、兄妹が多いこともあってか金銭面に敏感で、「イラストなんて売れへんと意味がないし、狭き門やねんから、やめとき。」と言われ、内心ムチャクチャ腹が立ったのですが、「確かにそうやな。」とってしまう自分がいました。

それ以来『夢』がなくなり、中学生活の大半をさ迷いながら、高校を出て大金をかけてまで大学で勉強したいかと悶々と考え、悩みました。

中学3年生の春に京都工学院高等学校の存在を母から教えてもらい学校説明会に行き、その中で興味を持ったのが『街づくり』でした。私は絵を描くこと以外にもものを作ることも、人の役に立って喜んでもらうことも大好きで、街づくりをしてみたいと興味を持ったのです。そして京都工学院高等学校に進学しましたが、また直ぐに、民間企業に就職するか公務員になるかの二者択一を迫られました。「やらずに後悔するより、やって後悔した方が良い」公務員試験にチャレンジし、現在京都市役所の建設局で土木技術職員として働いています。

数々の選択を20年間でしてきましたが、私は何一つ後悔していません。仕事は辛いこともあります、嬉しかったこともあります。それは些細なことですが、私の一番やりたかった「人の役に立ち喜んでもらう」ということにピッタリと当てはまっています。そういった自分のやりたいことを忘れず、今後も「京都の街づくり」に一生懸命関わっていきたいと思います。これを二十歳の違いとさせていただきます。

令和4年1月10日 新成人代表 田中 鈴音

二十歳の誓い

一生に一度しか出来ない挑戦をするために「二十歳の誓い」に応募し、今ここに立っています。これまでの私自身を振り返ると、何事も上手くこなすタイプではなく、壁にぶつかり続けて、何かを成し遂げるのに、時間がかかってきました。

私は小学生の頃からトランペットを吹いており、中学・高校生も吹奏楽部に入ってトランペットを担当していました。しかし、思うように高音が吹けず。2年間コンクールのレギュラーに成れませんでした。我武者羅に練習しても全然上達せず、後輩には抜かされ、ノイローゼとまではいきませんが精神的に滅入ってしまい、次第に練習することが苦しくなっていました。

そんなある日、顧問の先生に「このまま続けてもレギュラーは難しいから別の楽器に移らへんか？」と言われ、一番吹きやすいバスクラリネットに配属されたのです。いくら吹きやすいと言っても、トランペットとクラリネットでは、指使いが全く違い、戸惑うし、慣れるまでに時間がかかりました。それだけではなく後輩から指導を受けるという、小学生の時から楽器をやってきた私としては何とも情けない思いになりました。

しかし知らない楽器だからこそ基礎から丁寧に練習していくうちに、日々自分が上達していくのを感じられるようになったのです。あれだけトランペットで苦しんでいたのに、練習することが楽しくなりました。その後も努力を重ね、三年生でついにレギュラーの座を掴むことが出来ました。そしてコンクールに出場し、やっとこれまでの努力が報われたという達成感を味わいました。一つ一つ丁寧に向き合えば、一步一步確実に成長することが分かったのです。

これから先の未来は、毎日が初体験の連続で前に進むことも一苦労することになると思います。将来は公共交通機関の活性化を通して、街の発展に関わる仕事をしたいと思っていますが、正直今大学の成績は低迷しています。でも一歩ずつ前に進んでいけば夢が叶うと信じて頑張っていきます。

一つ一つの問題に真正面から丁寧に取り組んでいき、自分自身の力で未来を切り拓ける大人になりたいです。このことを二十歳の誓いとさせていただきます。

令和4年1月10日 新成人代表 市田 暉昂

二十歳の誓い

私は幼い頃から緊張しやすく赤面症でした。小学5年生の6月、授業中に当てられた簡単な計算問題が解けなくて、緊張で頭が真っ白、どんどん顔は真っ赤になっていくのを感じました。「みんなにどう思われてるんやろ」って思うと、恥ずかしくてたまりませんでした。それ以来、周りの視線に対して恐怖心を持つようになり、この日をきっかけに、学校や塾の教室に入ることができなくなったのです。寒い冬に廊下で先生の話の聞いたり、親と一緒に授業を受けてくれた時期もありました。大学が開いている「こころのクリニック」にも何度か通い、親が先生と話をしている間、大学院生の方が私に前向きになる話をしてくださったこともありました。

小学6年生にあがる初日の朝、私は学校へ行きたいという気持ちと行けない気持ちが交錯し、玄関から外に出ることができませんでした。その時、いつも優しく見守ってくれた父親が突然「今日は何があっても遅れずに登校しなさい」と強い口調で言い、衝撃を受けました。それと同時に、今日行かなければもう行くことはできないと感じました。その日私は泣きながら登校しました。ですが、この日をきっかけに学校に行けるようになり、大きな壁を超えることができたのです。

実は今また壁にぶつかっています。少人数のゼミの授業で意見を求められても、何も言葉が出てこない自分に気づきました。自分の考えが分からないのです。

これまで問題意識を持って、人に相談して意見を求め、自分で答えを見つけてこなかったからだと思います。人との苦手な状況からも、逃げてきました。ですが、これから社会に出て人と深くつながるためには、このような自分を変えなければいけません。

今ここに立っているように、苦手な状況から逃げず、場に慣れることが自分を変える大きな手段ではないかと考えています。問題に直面した時には、人に頼り相談をすることが染み付いてしまっていますが、まずは自分で考えることに努めようと思っています。幼い頃から苦手意識を持っていたことに自ら挑戦するのは難しいと思います。でも少しずつ経験を積み重ねていながら、自分の意見を自分の言葉で言える人になりたいです。このことを私の「二十歳の誓い」とさせていただきます。

令和4年1月10日 新成人代表 森田 咲季

二十歳の誓い

私は高校2年生の冬、学校の帰宅中の駅で倒れている男の子を見かけました。その子の周りには人がいっぱい、駅員や医療の知識を持った方が命を繋ごうと必死でした。でも私は足がすくみ、消極的な性格から手伝えることは無いかと聞くことすらできず、ただ見ているだけでした。そこに救急隊が駆けつけ、迅速に状況を把握し、冷静沈着に処置を行い、焦っているお母さんに、一つ一つの処置や行動を細かく説明しました。「お母さん、今、処置をしています」「搬送準備をしています」「お子さん頑張ってるからお母さんも頑張ってくださいね」その姿は、まさにヒーローでした。その時私は「救急救命士になりたい」と強く思いました。

幼い頃から看護師である母の姿を見て、「命を救う」という職業には憧れてはいたのですが、度々夢が変わってしまいました。でもこの経験がきっかけとなり、救急救命士の資格を持った消防官になるために、資格が取れる大学へ進学しました。

大学では、国家試験に合格するための医療の知識の勉強だけでなく、大規模災害を想定した訓練施設があるので、実践的に学んでいます。実習は決して楽なものではなく体力的にも精神的にもしんどいですが、同じ志を持った仲間から多くの刺激をもらい、「救命救急士になりたい!」と思った“きっかけ”を忘れることなく日々乗り越えています。

これまでは消極的だった私が「京都市で消防官になり、多くの人の命を救い地域貢献する」という明確な夢ができたことで、地元の消防団に入団し、このような式典という大きな舞台上、大勢の方々の前で発表させて頂きたいと思うようになり、全てが変わりました。2年後には国家試験、消防官になるための公務員試験も控えています。頑張りたいと思います。

「助けを求める声があったら全力で助けに行く。命を守り、救うことで地元京都に地域貢献する」消防官になります。自分も夢を頂いたように、子ども達に夢を持つきっかけを与えられるヒーローになるということを、「二十歳の誓い」とさせて頂きます。

令和4年1月10日 新成人代表 水沼 千紘

二十歳の誓い

私には幼い頃から抱いている夢があります。それは朝ドラのヒロインになることです。小学三年生から朝ドラを見続けてきましたが、特にカーネーションの尾野真知子さんの迫力ある演技を見て「凄い！」と感動したのを覚えています。そして小学校の卒業式で「女優になりたい」と大声で叫びました。7年経った今も女優になりたい夢は変わっていません。

小さい頃から人前に立つのが好きで、中学3年の時には生徒会副会長として行事などを取りまとめていました。しかし高校になってからは勉強や部活に明け暮れて次第に人前で話をするのが少なくなりました。

私は1年間浪人生活を経験しました。でもこの浪人生活は自分自身と向き合った最も意味のある一年となりました。目の前の勉強、進路そればかり気にして、自分の好きなこと、したいことから離れていたことに気づいたのです。私の好きなことはものをクリエイトすること。女優になりたい夢にも通じるところがあります。自分の作品を作ったり、表現することに興味があるという昔からのチャレンジ精神を思い出したのです。先生からは美術系は無謀だと言われましたが、自分で決めた道は絶対に譲らないと腹を括り、進路を理系から美術系に変更し受験をやり遂げました。

大学に入学し、自分の周りはほとんど年下であまり馴染めていません。そんな自分を情けなく感じ今回二十歳の誓いにチャレンジしようと決めました。積極的に何でも挑戦する気持ちは私を強くしてくれますし、そこで沢山の人が出会うことができ、自分のレベルが上がっているなって感じるができます。

「朝ドラのヒロインになること」それももちろん諦めたわけではありません。人生は一度きり、後悔はしたくありません。

自分の納得いく生き方をして周りの人にポジティブなパワーを与えられる人間になりたい。このことを私の二十歳の誓いとさせていただきます。

令和4年1月10日 新成人代表 芝本 登萌